

3 言語活動を計画しよう

★言語活動は、生徒の思考力、判断力、表現力等を育むための活動です。指導計画を立てる際には、その単元（題材）の中で「**思考・判断・表現**」を指導・評価する場面に、**言語活動を組み入れる**ことが基本となります。

では、具体的にどのようにすればよいのでしょうか。実際の授業から考えます。

生物基礎

- 1 単元名 免疫
- 2 単元の目標 病原菌などの異物を認識、排除して体内環境を保つ仕組みについて、観察、実験などを通して基本的な概念や原理・法則の理解を深め、科学的な見方や考え方を養う。

3 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	観察・実験の技能	知識・理解
・免疫について関心を持ち、意欲的にそれらを探求しようとする。	・病原などの異物を認識、排除して体内環境を保つ仕組みを考察し、 <u>導き出した考えを表現している。</u>	・免疫について観察、実験などを行い、基本操作を習得するとともに、それらの過程や結果を的確に記録、整理している。	・免疫とそれと関わる細胞の働きについて理解し、知識を身に付けている。

4 単元の指導計画

時	学習内容	学習活動	ねらい	評価の観点				評価規準
				関	思	観	知	
1	白血球の食作用	食作用の観察	自然免疫としての食作用の様子を的確に記録する。			◎		・白血球の食作用の様子を観察し、観察結果を的確に記録することができる。
2	自然免疫と獲得免疫	免疫システムの全体像の把握	自分の経験と関係付けながら、免疫システムの全体像について理解する。	○			○	・自然免疫と獲得免疫の違いを抗原特異性の点から理解している。 ・自然免疫について、自分の経験と関連付けて理解しようとしている。
3	体液性免疫と細胞性免疫	体液性免疫と細胞性免疫の比較	マクロファージやリンパ球の働きによる免疫の仕組みを理解する。				◎	・体液性免疫と細胞性免疫におけるマクロファージやリンパ球の働きを理解している。
4	免疫と病気、免疫の医療への応用	日常生活の免疫の仕組みとの関連付け	日常生活と免疫の仕組みと関連性を見いだす。		○			・アレルギーは免疫反応が過敏に起こることによって生じていることを考察できる。 ・血清療法は、抗原抗体反応による治療方法であることを考察できる。
5	免疫と病気、免疫の医療への応用	日常生活と免疫のしくみとの関連についての 表現活動	身近な疾患と免疫の仕組みとを 的確に関連付けて表現している。	◎				・免疫と身近な疾患、免疫の医療への応用について関心を持ち、その仕組みを 科学的に説明しようとしている。
6					◎			・身近な疾患や医療への応用（自己免疫疾患、エイズ、予防接種）について免疫の仕組みと 関連付けて説明している。

○指導にいかす評価 ◎記録に残す評価

★この指導計画では、言語活動を単元の最後に設定しています。

単元の前半（1、2、3時）で「観察・実験の技能」「知識・理解」に係る部分を指導・評価します。

単元の後半では、それらを活用し、科学的な見方や考え方を養うことを目指します。

第4時は、日常生活との関連性を意識させ、第5、6時で「説明する」という「言語活動」を設定し、思考力、判断力、表現力等を育むように計画しています。

★ 言語活動での留意点

質が大事

話合いをすることだけが言語活動ではありません。発言回数が多ければ、言語活動が充実しているわけではありません。思考・判断のプロセスを通じた言葉のやりとりをしてこそ、充実した言語活動と言えます。その単元（題材）における教科の目標を実現するために最適な言語活動を効果的に計画しましょう。「活動あって学びなし」は禁物です。

従来 of 指導観を転換しよう

従来は、一斉授業で、教師が一方向的に説明し、生徒が板書をノートに写すだけといった授業が多く見られました。これからは、生徒の発言等をうまくいかし、深まりのある授業を展開していく必要があります。なぜそのように考えるのかを生徒に問い直し、吟味していくことで、クラス全体の思考が深まっていくと考えられます。

評価のポイント

教科の目標が、言語活動を通してどのように実現されたかを評価することが基本です。言語活動の様子や出来上りを評価するものではありません。そのためには、例えば、振り返りシートなどを利用し、言語活動における思考のプロセスについて、生徒自身に自分の言葉でまとめさせ、それをもって評価するといった工夫が必要です。

「確かな学力」の育成を目指して

- ① 「考える課題」を設定する
- ② 自分の考えを自分の言葉で整理させる
- ③ 考えを交流する機会を増やす
(ペアワーク、話合い、回覧、作品集等)
- ④ 自己の学習を客観的に振り返らせる
- ⑤ 活用する力をみる試験問題を取り入れる



言語活動は毎時間行わなければならないというものではありません。「思考・判断・表現」の場面を意識し、「単元（題材）」という単位で計画していきましょう。